

三島市郷土資料館企画展

駿東・北伊豆の戦国時代

— 北条五代と山中城 —

山中城西ノ丸跡全景

平成28年10月15日(土)～平成29年1月22日(日)

三島市郷土資料館

二代 北条氏綱 (1487-1541)



紙本著色北条氏綱像

室町時代成立、神奈川県指定重要文化財、早雲寺蔵、画像提供：箱根町立郷土資料館
宗瑞嫡男、母は小笠原備前守娘。永正15年(1518)家督を譲られる。本拠を小田原に移し、氏を北条に改め、虎朱印(「禄寿応穩」)の使用を開始した。また勢力範囲を富士川以東の駿河・武蔵・上総・下総に広げ、東国に不動の地位を確立する。

初代 伊勢宗瑞 (1456?-1519)



絹本淡彩北条早雲像

室町時代成立、国指定重要文化財、早雲寺蔵、画像提供：箱根町立郷土資料館
実名盛時、法名宗瑞、庵号早雲。室町幕府政所執事伊勢氏の庶流である備中伊勢氏の出自。明応2年(1493)伊豆へ乱入、堀越公方足利茶々丸を討って平定し、韮山城を築いて居城とした。また小田原に進出し、相模国を平定する。

三島を含む伊豆国は、十五世紀末の伊勢宗瑞(北条早雲)の乱入以来、関東の雄・戦国大名北条氏の支配をうける領国となりました。

はじめに—北条五代—

Pickup!

北条氏規 (1545-1600)

氏康五男、母は今川氏親娘、氏政の弟。永禄12年(1569)頃より韮山城にしばしば在城したことが確認でき、小田原合戦の際も同地で籠城戦を行った。氏政・氏直父子と徳川家康、豊臣秀吉との取次役をつとめた。

五代 北条氏直 (1562-1591)



紙本著色北条氏直像

土佐光起筆、寛文10年(1670)頃成立、早雲寺蔵、画像提供：箱根町立郷土資料館
氏政次男。母は武田晴信(信玄)娘(黄梅院)。天正8年(1580)家督を継ぐ。武田氏旧領をめぐり徳川家康と争った際、講和の条件として家康娘の督姫を妻とする。小田原合戦後、秀吉の命で高野山に追放される。翌天正19年に赦免され、一万石を与えられる。同年中に大阪で死去した。

四代 北条氏政 (1538-1590)



紙本著色北条氏政像

土佐光起筆、寛文10年(1670)頃成立、早雲寺蔵、画像提供：箱根町立郷土資料館
氏康次男。母は今川氏親娘(瑞溪院)。永禄2年(1559)家督を継ぐ。天正18年(1590)の小田原合戦では、息子氏直とともに本城小田原城に籠城している。降伏後、豊臣秀吉より切腹を命じられ、弟の氏照とともに自刃した。

三代 北条氏康 (1515-1571)



紙本著色北条氏康像

室町時代成立、神奈川県指定重要文化財、早雲寺蔵、画像提供：箱根町立郷土資料館
氏綱嫡男。母は養珠院宗栄。天文10年(1541)氏綱死去により家督を継ぐ。代替わり時に大規模な検地を実施、その結果を基礎に税制を改革した。さらに公定枩を設定し、貨幣制度や伝馬制を確立するなど、領国の支配体制をより強固なものとした。また武田・今川との間で三国同盟を結んだ。

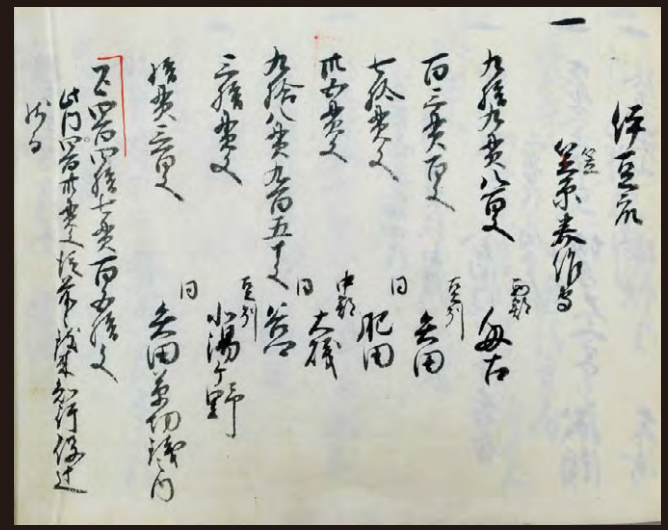
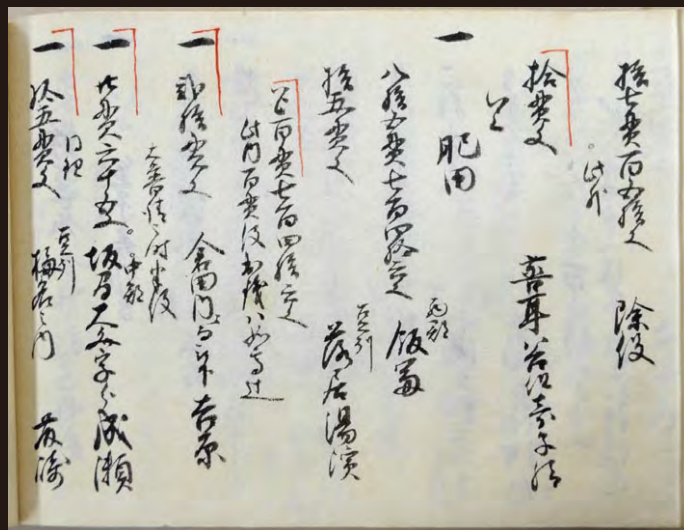
北条氏と伊豆地域

伊豆地域は北条氏が獲得した最初の「領国」でした。本拠が小田原に移り、韮山城が支城となったのちも、北条氏の当主が直接支配にあたりました。領国支配の基本である村々からの労働力の徴発の賦課・徴収権は「郡代ぐんたい」によって遂行され、その郡代には宗瑞（早雲）伊豆乱入以来の譜代の重臣である笠原・清水の両氏が任じられました。



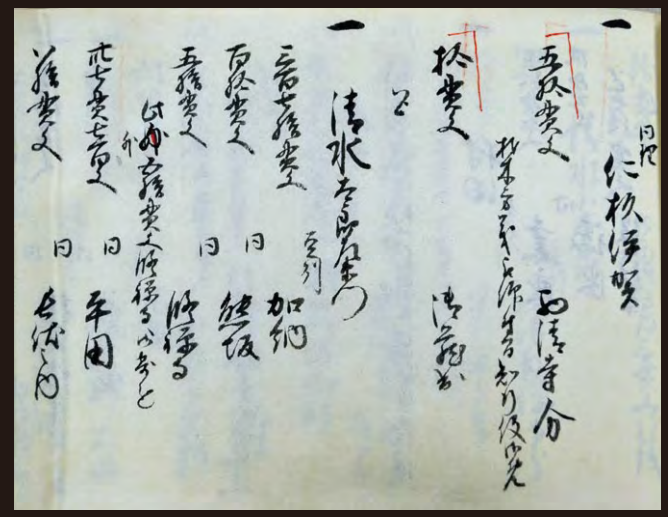
韮山城絵図 江戸時代成立

韮山城は伊豆の国市韮山に所在した。明応二年（一四九三）、伊勢宗瑞は伊豆に乱入、北条（同市四日町）の堀越を本拠としていた堀越公方足利茶々丸を攻め、国外に追放する。伊豆国進出の後、宗瑞は韮山城を築いて居城とし、伊豆の経営にあたり、さらに相模国を勢力下におさめている。宗瑞没後は二代氏綱によって本拠が小田原に移され、韮山城は支城（領国内の軍事・行政単位ごとの支配を管轄する城）の一つとなった。小田原合戦の際には北条氏政の弟氏規うぢのりが在城し、三ヶ月にわたる籠城戦の末に開城に至った。



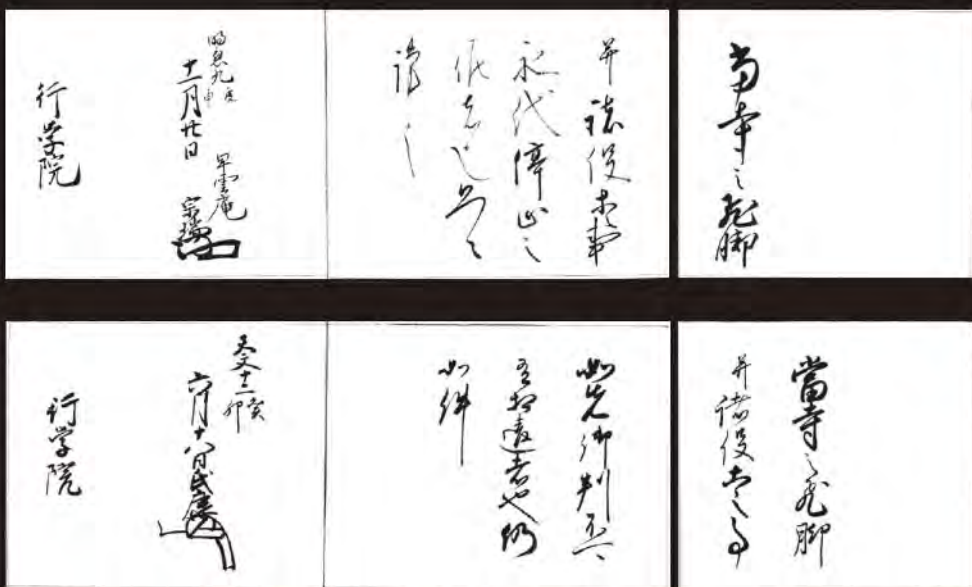
小田原衆所領役帳

永禄2年（1559）成立、元禄5年（1692）写、国立公文書館内閣文庫蔵
 いわゆる「北条家所領役帳」と称されるもの。北条氏康が作成を命じたもので、北条氏一門・家臣の役高（所領やくだかに応じて割り振られた役務の負担額）を記載した帳簿。
 写真は「伊豆衆」（韮山城配属の北条氏家臣団、伊豆の守備・行政支配にあたった）の記載部分冒頭。「笠原美作守」（網信）は伊豆（田方郡）、「清水太郎左衛門」（康英）は伊豆奥（賀茂郡）の郡代であり、伊豆衆の寄親（他の家臣を軍事的・政治的に指揮する立場、北条氏の直臣）であった。三島市内の地名として、「矢田」（谷田）・「梅名」・「平田」・「長伏」等が確認される。



明応九年(一五〇〇)十一月二十日伊勢宗瑞判物写[上]
 天文十二年(一五四三)六月十八日北条氏康判物写[下]
 明治二十二年(一八八九)影写、東京大学史料編纂所蔵本覚
 寺文書

右は伊勢宗瑞より、下は三代氏康より、行学院に宛
 てて出された文書で、ともに同院の飛脚・諸役の免
 除を認めるもの。明応九年五月、身延久遠寺十一世
 日朝(本覚寺三島市泉町)開山僧日出の弟子)によつ
 て、本行寺(同東町、現存せず)と本覚寺とをあわ
 せて一院となし、「行学院」と号すことが取り決めら
 れた。宗瑞の判物はその約半年後に発給されている。



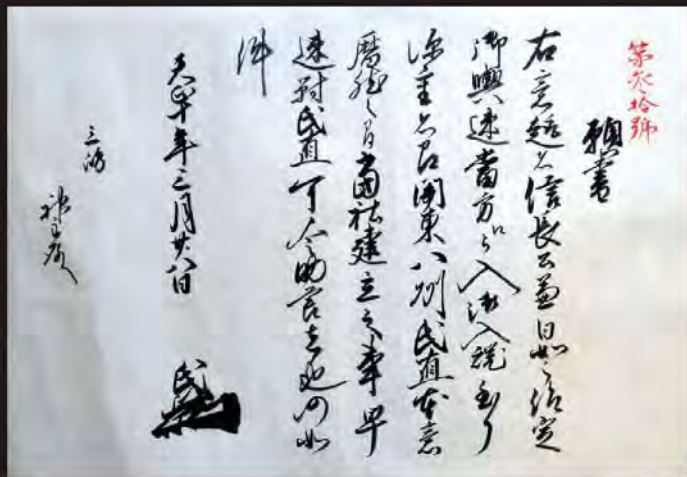
大永六年(一五二六)九月八日北条氏綱
 判物
 重要文化財、三嶋大社蔵

北条氏綱より三嶋社(現三嶋大社)の
 社人に宛てて出された文書で、三嶋社
 造営のために諸国で勧進活動(寄付を
 募ること)をするよう命ずるもの。
 氏綱は大永二年(一五二二)頃より領
 国内有力寺社の造営に着手しており、
 箱根権現や伊豆山神社の再建が行われ
 ている。三嶋社の造営もこうした流れ
 の一環に位置付けられるもので、父宗
 瑞の意志を継承する形で進められた。



山中城跡出土の銭貨

各曲輪より総計 34 枚の銭貨が出土した。開元通宝(唐銭)、
 祥符通宝・皇宋通宝・嘉祐通宝・嘉祐元宝・熙寧元宝・
 元豊通宝・元祐通宝・紹聖元宝(以上北宋銭)、洪武通宝・
 永樂通宝(以上明銭)が出ており、最多となるのは永樂銭で、
 全体の 47%を占める。また一部は品質が粗悪で、私鑄銭の
 可能性が高い。戦国時代は中国よりの輸入銭を使用していた
 が、銭の私鑄が増大し、撰銭(良銭と悪銭を選別すること)
 が盛んに行われ、各大名はその対応に追われていた。永樂
 銭は東国で特に重んぜられたもので、北条氏はこれを基準
 貨幣として用いている。



天正 10 年(1582) 3 月 28 日北条氏政願文

明治時代写、関守敏氏蔵「官幣大社三島神社所蔵古文書」

織田信長により武田氏が滅ぼされた直後、北条氏政が三
 嶋社に奉った願文。氏政は、織田氏との姻戚関係が構築
 されれば関東八州が息子氏直の思うままになるだろうとし、
 信長娘の氏直への興こし入れが速やかに果されることを祈
 願した。果たされたあかつきには同社建立を氏直に助言
 することを誓っている。

山中城の築城

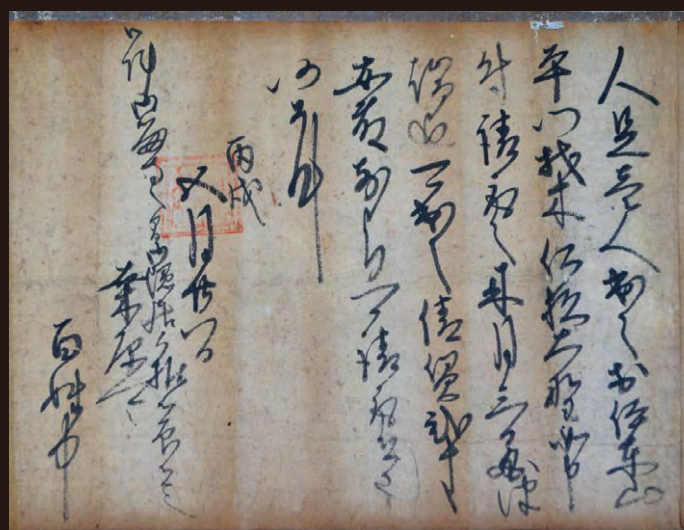
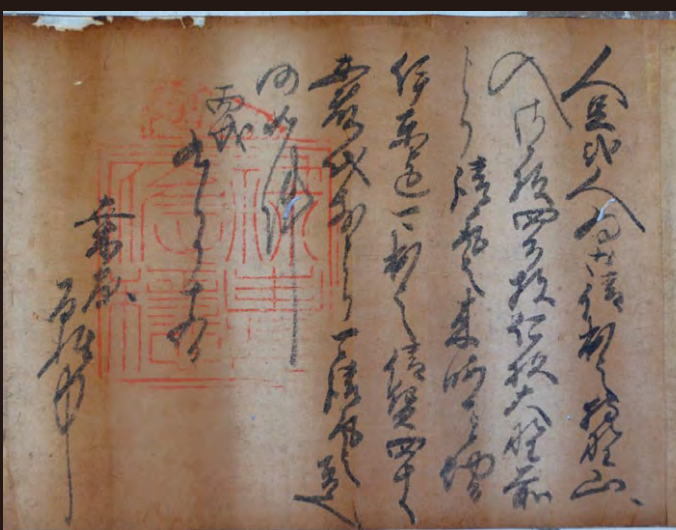
山中城は、北条氏の本拠小田原の西の防衛を担う地として、東海道箱根路の西麓に築かれました（三島市山中新田・函南町桑原）。築城年代について、江戸時代初期成立の軍書『甲陽軍艦』は、永禄十二年（一五六九）の武田信玄の駿・豆侵略の記述中に「山中」の語を登場させており、これより前に同城が成立していた可能性がうかがわれます。しかしその詳細は明らかでなく、天正十五年（一五八七）十一月八日の北条家朱印状がその存在を確認できる確実な初例となります。

山中城は防衛を目的とした山城であり、北条氏の城に共通して見られる「障子堀」が備えられました。



山中城西ノ丸北側【左】・南側【右】の障子堀

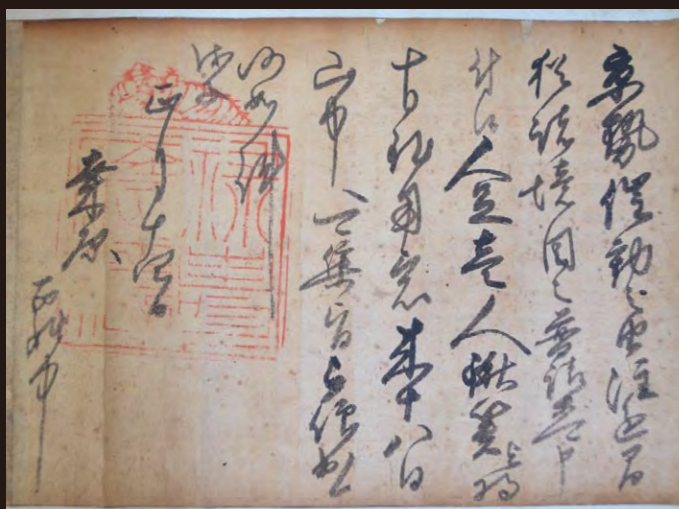
障子堀は、箱堀の底面に畝状の障壁を一定間隔で設置したものです。地山の堀り残しによって構築され、堀内における敵兵の横の動きを遮断する目的で設けられる。なお、障子堀には単列型【右】と複列型【左】とがあり、前者は特に「畝堀」とも呼ばれる。



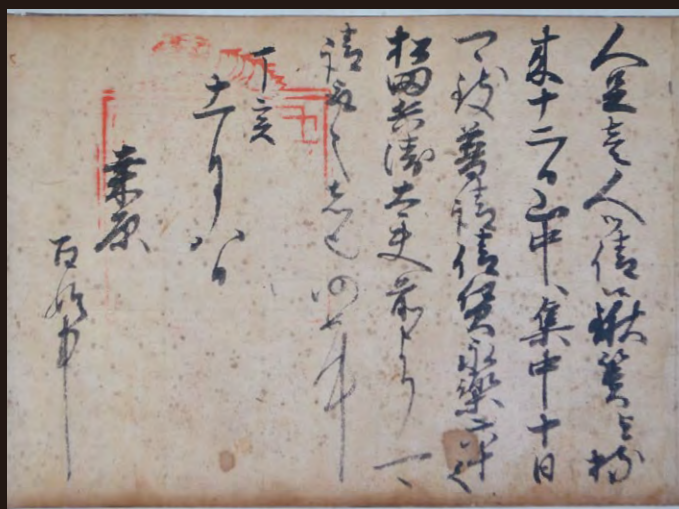
天正 14 年 9 月 15 日北条家朱印状 個人蔵

天正 14 年 (1586) 5 月 28 日北条氏政朱印状 個人蔵

右は、北条氏政より伊豆国桑原郷（函南町）の百姓に宛てて出されたもの。城普請（構築・修築）用の材木を伊東山より運ぶための労働力が徴発されている。当主氏直が宇都宮氏との戦いで出陣中だったため、隠居の父氏政が朱印（「有効」印）を捺している。左も同様、桑原の百姓に対し、伊豆国狩野山（天城山）から伊東まで材木（板）を運ぶための労働奉仕を命ずるもの。右文書には「津の端まで」運ぶように、とあり、伐り出した材木の運搬に海上交通が用いられたことがわかる。



天正 16 年正月 14 日北条家朱印状 個人蔵



天正 15 年 (1587) 11 月 8 日北条家朱印状 個人蔵

上は2点とも、桑原郷の百姓に対して山中城の修築への労働奉仕を命じたもの。この前年、北条氏と同盟関係にあった徳川家康が豊臣秀吉への従属を示しており、秀吉から関東・東北の「惣無事」(戦国大名の戦闘停止)の取りまとめ役を命じられている。秀吉はまた、東国の諸大名等に対しても家康に取りまとめを任せたい旨を伝え、これに従うよう命じていて、北条氏もこの意向に従うか否かの選択を迫られることとなった。天正 15 年正月より、北条氏は本拠小田原城をはじめとする拠点城郭の修築を行い、秀吉の侵攻に備えている。駿河との国境防備の前線となる山中城の修築もそうした動きの中で進められていった。左の文書冒頭には「京勢(秀吉の軍勢)催し動く由を注進す間(報告されてきているので)、諸の境目の普請等を申し付くべく候」と見え、秀吉の動静に敏感に反応している様子がうかがえる。

山中城跡から出土した日常生活品・建築用具



兵糧庫・西ノ丸・本丸等より出土の陶磁器類

輸入品として青磁・白磁・染付、国産品として瀬戸(愛知)・美濃(岐阜)・初山(浜松)・志戸呂(鳥田)・常滑(愛知)窯の各製品が出土している。点数の総計は他の城郭跡に比して少ない。



(表)



(裏)

兵糧庫土坑出土の毘沙門天像(装飾用具)

現高7cm、幅2.8cm、厚さ2cmの小ぶりの立像で、楠木を柱目に木取りした角材に彫刻を施した一木造となっている。なんらかの製品の装飾として付属していたものと推測される。



西ノ堀土坑出土の線刻磔

「十六武蔵」という遊戯に用いられた盤面で、1辺2.8~3.6cmの正方形とその対角を結ぶ線刻を確認できる。親石(黒石)1個、子石(白石)16個を用いて勝ち負けが競われた。



出丸溝・西ノ丸より出土の把手【左】、兵糧庫出土の釘【右】

把手はいずれも銅製である。左3点は長さ10cm弱で、扉に取り付けられたもの。右1点は幅5cmで、鍍金が施されており、箆等(めっき)の調度品の把手と考えられる。兵糧庫より発見された和釘は鉄製で、大きいもので長さ10cm程度あり、すべて鍛造品(圧力を加えて成形したもの)。

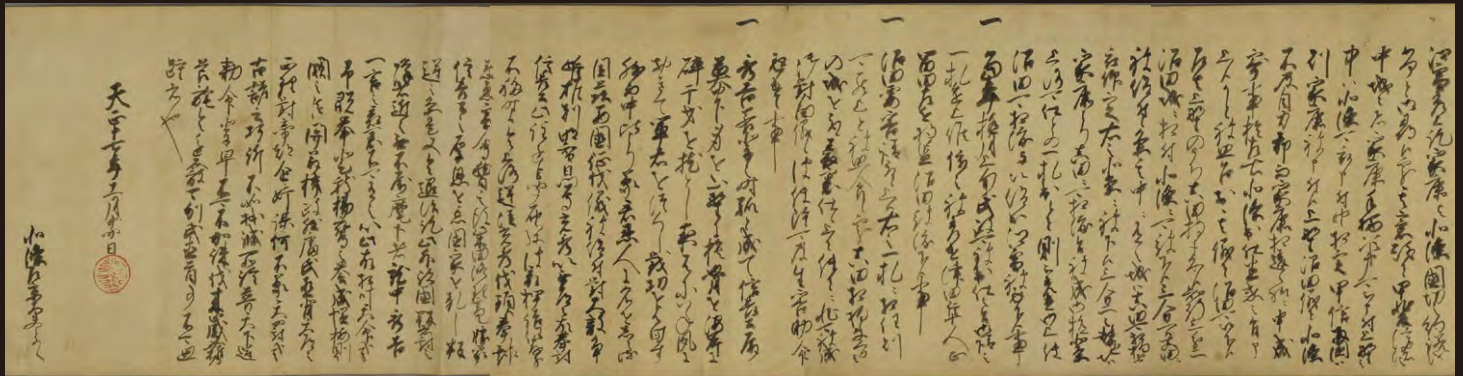
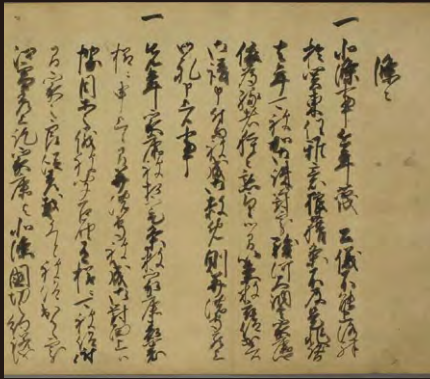


山中城の戦い

近畿・四国を勢力下に収める

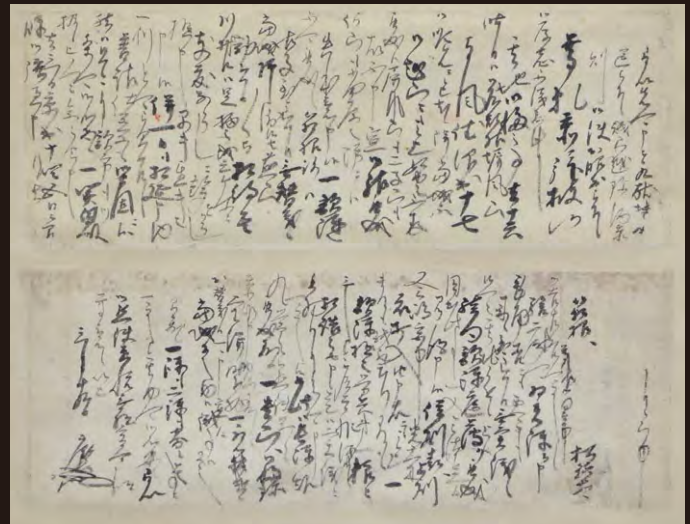
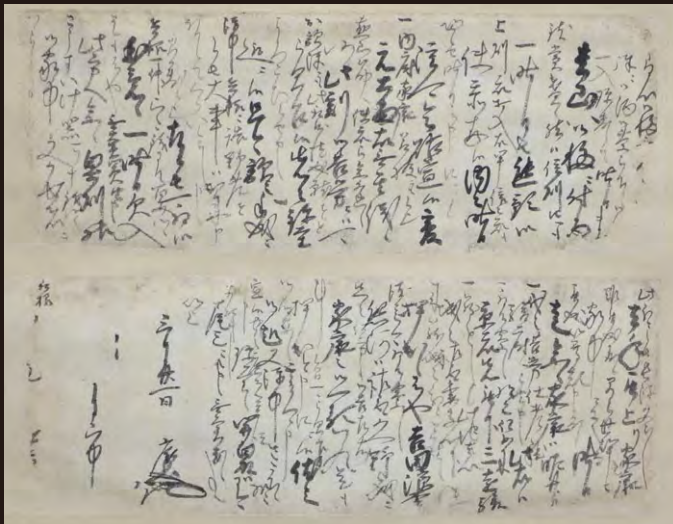
秀吉は、天正十六年（一五八八）九州平定を果たし、その勢力の及ばない地は残すところ東北と関東のみになりました。同年八月、徳川家康のとりなしで、当主氏直の叔父氏規が上洛、秀吉への謁見を遂げ、北条氏の豊臣政権への従属が内外に示されますが、両者の関係性は引続き緊張をはらむものでした。

そうした中、天正十七年十一月に名胡桃城事件が起こります。この事件が直接のきっかけとなって、秀吉は氏直に「宣戦布告状」を送りつけ、両者の衝突は避けられないものとなりました。



天正 17 年（1589）11 月 24 日豊臣秀吉朱印状 早稲田大学図書館蔵

北条氏当主氏直に宛てて出されたもので、いわゆる秀吉の「宣戦布告状」の写し。同月初頭に北条氏家臣猪俣邦憲が真田氏領内の名胡桃城（群馬県利根郡みなかみ町）を奪取する事件が起こる（名胡桃城事件）。同城が位置する地は長らく真田・北条両氏の間でその領有権が争われていた。天正 17 年 7 月に至り、秀吉が裁定を下したことで決着をみており、名胡桃城は真田の領有分の内に含まれていた。この事件は秀吉の裁定を無視した行いとしてその逆鱗に触れ、本状が出されるに至った。末尾には「来歳必ず節旄（天皇より授かった旗）を携へて進発せしめ、氏直の首を刎ぬべき事、踵を廻らすべからざるものなり」と記されおり、衝突が不可避となった状況がうかがえる。翌天正 18 年 2 月、先発隊としてまず家康と羽柴秀次（秀吉の甥）が、続けて織田信雄（信長の息子）が出陣（以上東海道軍）し、3 月 1 日に秀吉が京都の聚楽第を出立、北条氏征伐が始まった。



天正 18 年 3 月 21 日松田康長書状 箱根神社蔵

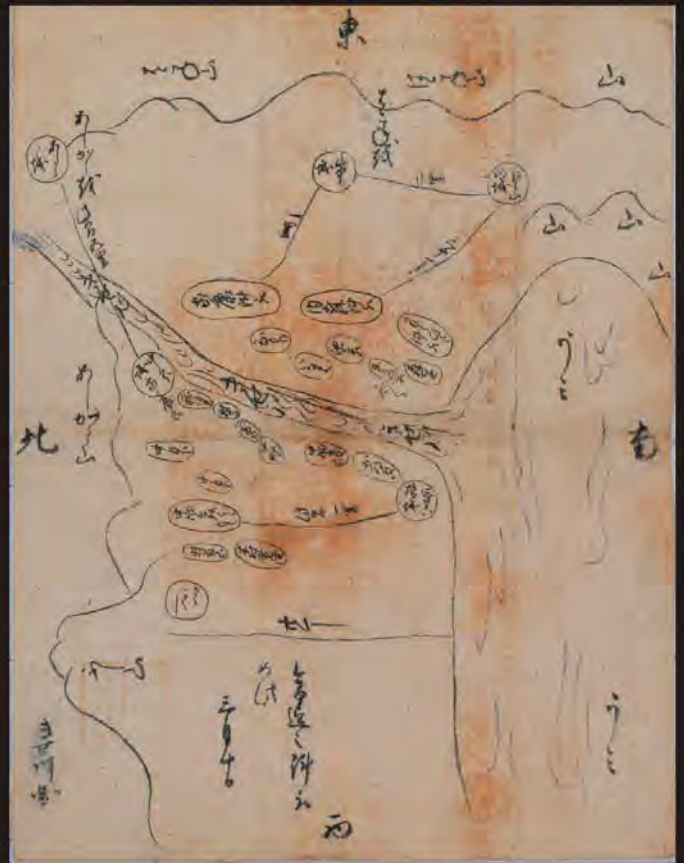
天正 18 年 3 月 19 日松田康長書状 箱根神社蔵

2 点とも、北条氏宿老で山中城城将となった松田康長（小田原衆筆頭松田憲秀の従弟）が箱根権現別当に宛てたもので、陣中見舞に対する返札である。別当から康長等のもとへ酒・茶等が差し入れられていて、康長はその御礼に加えて目下の状況を知らせている。これより先の同月 2 日には家康が黄瀬川（北条領・徳川領の国境）畔の惣河原（長泉町）に、3 日には東海道軍大将の秀次が沼津に着陣しており、東海道での戦端は 3 日、三島において開かれている。康長は、防備はととのっているので安心するようにと伝え、敵に動きはなく、また兵糧に難渋しているらしいので長期戦にはなりがたいだろうとも述べている。



伊豆山中城図 江戸時代成立

山中城を囲む豊臣方の陣取および進軍経路を図示したもの。京都を発った秀吉は、3月27日、三枚橋城に到着した。29日早朝、山中城は羽柴秀次を大将とする約7万の豊臣方軍勢に囲まれた。本図の箱根路三島側進入口には「一柳伊豆守」(直末)・「山内対馬守」(一豊)・「堀尾帯刀」(吉晴)ら秀次宿老の名を確認できる。対する北条方の軍勢はわずか約4千で、その優劣は明らかであり、大将松田康長、副将間宮康俊以下が討ち取られ、半日で落城に至った。



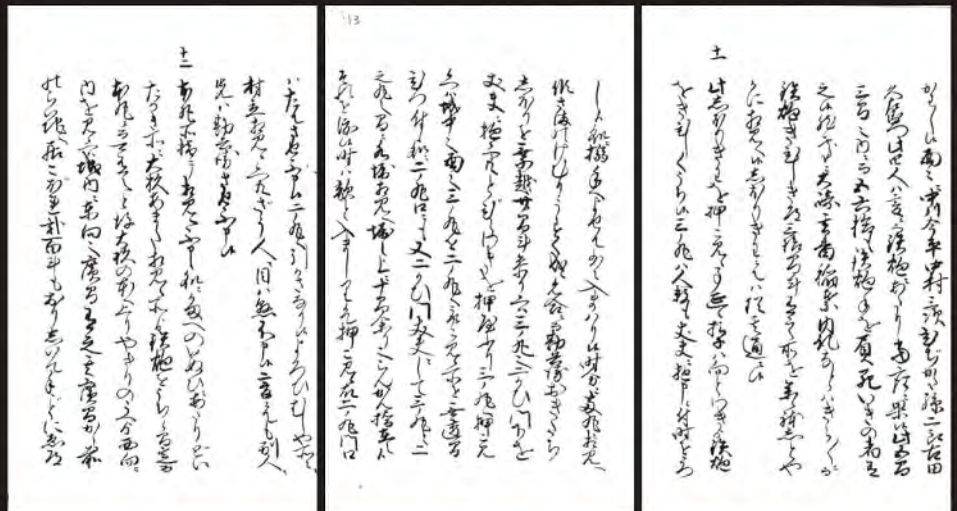
小田原陣之時貴瀬川陣取図 山口県文書館毛利家文庫蔵

3月10日までの豊臣方の貴(黄)瀬川畔での陣取状況の記録。「はこね越」中に「山中城」、その南方2里に「なら山の城」と記され、山中城北西方1里に「家康陣取」、葦山城北西方30町に「内府様陣取」(織田信雄)と見える。また黄瀬川河口西岸に「三まい橋城」(三枚橋城、沼津市)、その北方1里に「中納言様はたもと」(羽柴秀次本陣)とあり、それより東方に「中くほ城」(長久保城、長泉町)、西方に「こうこくし」(興国寺城、沼津市)が図示されている。



山中城跡出土の鉄炮玉・火縄銃部品

鉄炮玉は197発出土した。青色の鉛・青銅・錫の合金玉、白色の鉛玉、赤色の鉄玉が、いずれも未使用の状態で見つっている。火縄銃の部品は2点が出土している。写真左下は火縄を挟む火挾。右下は弾金または毛抜き金と呼ばれるもので、発射の際に火挾を押し上げるためのバネ。銅製で、西櫓より出土したものである。



『渡辺勘兵衛記』 明治19年(1886)謄写、東京大学史料編纂所蔵南部晋氏旧蔵文書。豊臣方武将渡辺勘兵衛が自身の若い頃の戦陣を回顧して著述したもの。『渡辺水庵覚書』とも。小田原合戦従軍時の記述中、山中城の戦いの様子が詳述される。上は、勘兵衛が鉄炮による攻撃の隙について三ノ丸、二ノ丸に押し入り、更に本丸に押し入らんとする際の様子を記した部分である。

山中城跡から出土した武器・武具類



だいきき まえだてもの しころ
岱崎出丸溝出土の前立物【左】・本丸西堀底出土の鍔【右】

前立物は兜の装飾の一つで、額部分に取り付けるもの。鍔は兜の鉢から垂らし、首から襟にかけてを防御するためのものである。【左】の前立物は、薄い板の上に紙を貼り、赤漆で塗り固めてできている。最大長 23.75 cm。裏面は赤漆塗のままだが、表面には金箔が押される。【右】の鍔は、裾が直線的に広がる「当世兜」と称されるもので、室町時代末以来の新様式の甲冑に付属する兜である。鉄製、黒漆塗で、外径 37 cm、内径 21 cm。5段の板札からなる。札とは甲冑を構成する板のことで、一枚板でつくられた札を特に「板札」と呼ぶ。



やぐら こしがたな すやり
西櫓出土の腰刀、西ノ丸・西櫓出土の素鍔

腰刀は、太刀に添えて腰の帯の間に差し入れて携行するもの。全長 35.1 cm で、刀と茎（柄に入っている部分）の間に鍔と釦（鞘から抜け出のを防ぐ金具）があり、鍔は赤銅製七々子地の小判型で、小柄あるいは筭を挟むために右側縁が切り取られている。

素鍔とは、穂先の形状が真っ直ぐな鍔の称。穂の長さ 11～13 cm の小型のものが出土しており、柄を欠く。戦国時代、鍔は戦場における武器の主流であった。



おど こざね くさずり
本丸西堀底出土の威された小札【左】・西櫓出土の草摺【右】

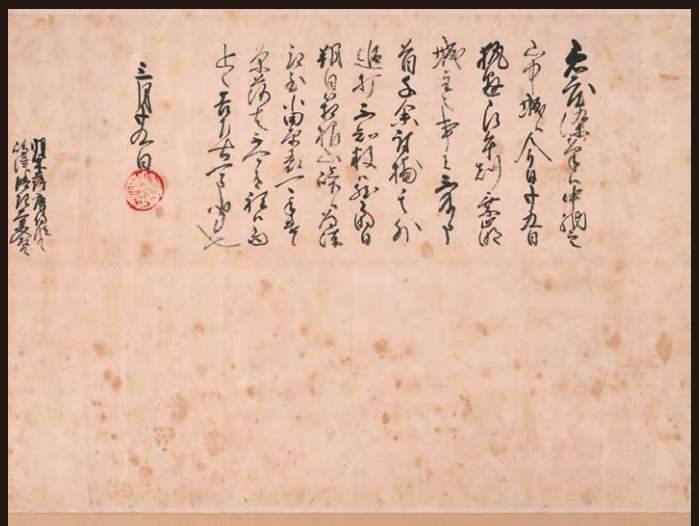
ともに鎧を構成する部品。札を糸や革でつづり合わせることを「威す」といい、【左】は小札が威された状態で出土した。草摺とは鎧の部位で、太ももを防御する部分の呼称であり、【右】はその一片である。【左】の小札は黒漆塗、幅 1 cm、長さ 6 cm で、鉄製。【右】は赤漆塗で下辺 17.18 cm、幅 10.53 cm。革あるいは薄板の上に布を貼り、漆をかけた作りと推測される。



こうがい こづか
西櫓出土の筭・出丸出土の小柄

上 3 点は髪を搔くのに用いられる筭、下 1 点は小柄（小刀）で、ともに刀の鞘に挿して携行する。筭にはいずれも七々子地の上に装飾を確認できる。小柄は刀身と底が失われており、鉄心を薄い銅板で覆った作りで、斜線の意匠が施されている。

天正十八年（一五九〇）三月二十九日
 豊臣秀吉朱印状
 国宝、東京大学史料編纂所蔵島津家文書
 山中城落城と同日、豊臣秀吉より島津義久・義弘兄弟に宛てて出されたもの。ほぼ同文の朱印状が鍋島直茂・加藤清正・黒田長政らにも送られた。山中城を午の刻（昼ごろ）に攻め落とし、城将松田康長はもろろんのこと、首千余を討ち捕らえ、さらに逃れた者も追い討つて、その数は知れないほどであると述べる。また翌四月一日に箱根峠に布陣することを知らせている。



戦後処理

豊臣方の軍勢により、北条氏の支城は次々と攻略されていきまし
た。四月中旬より籠城戦を続けて
いた本拠小田原城も、七月五日に
当主氏直が降伏の意を表して開城
に至ります。氏直は高野山に追放
され、父氏政は自刃し、五代約百
年にわたって関東に覇を唱えた戦
国大名北条氏は、ついに終焉の時
を迎えました。

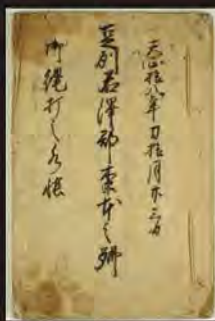
小田原を目指す豊臣軍本隊が
去った伊豆では「還住の制札」が
下され、戦後処理が進められてい
ます。



天正18年(1590)4月豊臣秀吉提書

三島市指定文化財

いわゆる「還住の制札」と呼ばれるもので、侵攻を受けた郷々村々に発給された。上は、伊豆国肥田郷・塚本郷・間宮郷(以上函南町)・沢郷(函南町上沢とされる)・安久郷・多呂村・北沢村・中島郷・梅縄村(梅名)(以上三島市)計9ヶ所に宛てて出されたもの。戦乱に際して逃げ散った百姓等にかえり住むことを認め、諸軍勢の家宅への押し入り等を禁じ、もし非分(道理に外れたこと)を働く者があれば厳罰に処すことを示して、治安維持を保障している。



天正18年丑10月23日豆州君沢郡松本之郷御縄打之水帳写【左】・同年庚丑豆州君沢郡中嶋郷御縄打水帳写【右】

松本・中嶋両郷(三島市)で実施された検地の記録。

北条氏滅亡後、伊豆は徳川家康の領有する地となった。家康は早速検地を実施、新たに組み入れた領地の実態把握と復興にあたった。

戦死者の鎮魂

北条氏の滅亡後、山中城三ノ丸跡に宗開寺が建立されました。起立者は同城の戦いで戦死した北条方副将間宮康俊の娘於久の方とされ、父康俊の菩提を弔うために建てられたと伝えられています(諸説あり)。



①柳直末墓、②大通君(一柳直末)碑、③松田康長墓、④間宮康俊・信俊・信冬墓、⑤追沼氏雅墓、⑥長谷川近秀墓、⑦多米長定墓

東月山宗開寺の墓碑

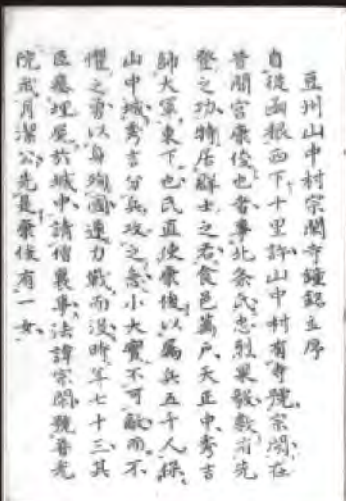
間宮康俊の墓のほか、同信俊・信冬、山中城城将松田康長、追沼氏雅、長谷川近秀、多米長定(以上北条方)、一柳直末(豊臣方)といった両軍の武将の墓が並ぶ。いずれも山中城の戦いで討死。

華陽院末寺豆州山中村宗開寺由緒書

(冒頭部分)



明治二十一年(一八八八)堀田感卓写、静岡県立中央図書館久能文庫蔵
嘉永二年(一八四九)同寺および名主以下から葦山代官江川英龍へ提出されたものの写し。由緒や寺領・寺宝について記される。



豆州山中村宗開寺鐘銘並序(冒頭部分)

嶺譽智堂著、寛政九年(一七九七)以降成立、祐徳稻荷神社中川文庫蔵、画像提供…国文学研究資料館

寛政九年に宗開寺の鐘を新鑄した際の記録。父を喪った於久の方が悲嘆に暮れる様子など、他の同寺由緒書にはない記述が見られる。

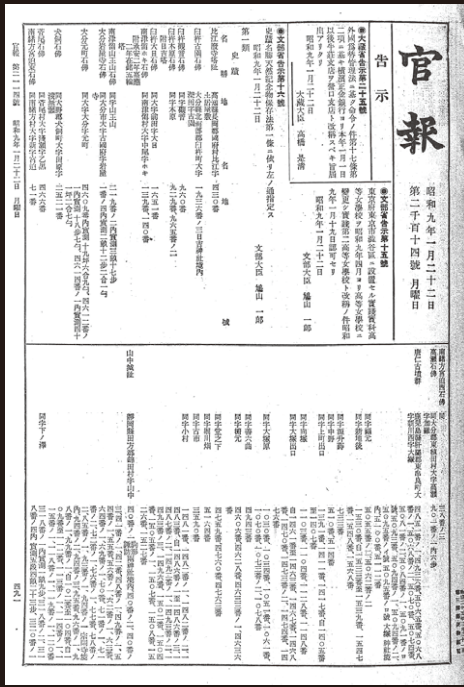


おわりに—現在の山中城—

昭和九年（一九三四年）一月二十二日、山中城跡の内、城郭主要部分九八・一八三・〇〇平方メートルが国史跡に指定されました。同五十三年三月二十日には一九六七三・九一平方メートルが追加指定を受けています。同五十六年に三島市制施行四十周年を記念して、「山中城跡史跡公園」として無料公開を開始し、平成十八年（二〇〇六年）には日本百名城に認定されました。

二〇一六年現在、山中城は、富士山と駿河湾を眺望でき、四季折々の自然を楽しめる史跡として、多くの観光客や地域の人々で賑わっています。

国史跡指定



『官報』二二二四号

昭和九年（一九三四年）一月二十二日発行、国立国会図書館蔵

史蹟名勝天然記念物保存法（大正八年四月九日公布・同年六月一日施行）第一条に基づき、この時「山中城跡」を含む六十件が指定を受けた（文部省告示第十六号）。

発掘調査



二ノ丸門跡の発掘調査風景

昭和 47 年（1972）2 月、三島市史跡山中城調査専門委員会が発足する。発掘調査団長に齋藤宏氏（市立北上中学校長）が就任し、宮脇泰一氏（日本大学教授）・八幡一郎氏（上智大学教授）が顧問となり、翌 48 年より発掘調査を開始した。調査は平成 4 年（1992）度まで継続的に行われ、第 17 次調査までの成果が報告書としてまとめられている。

整備事業



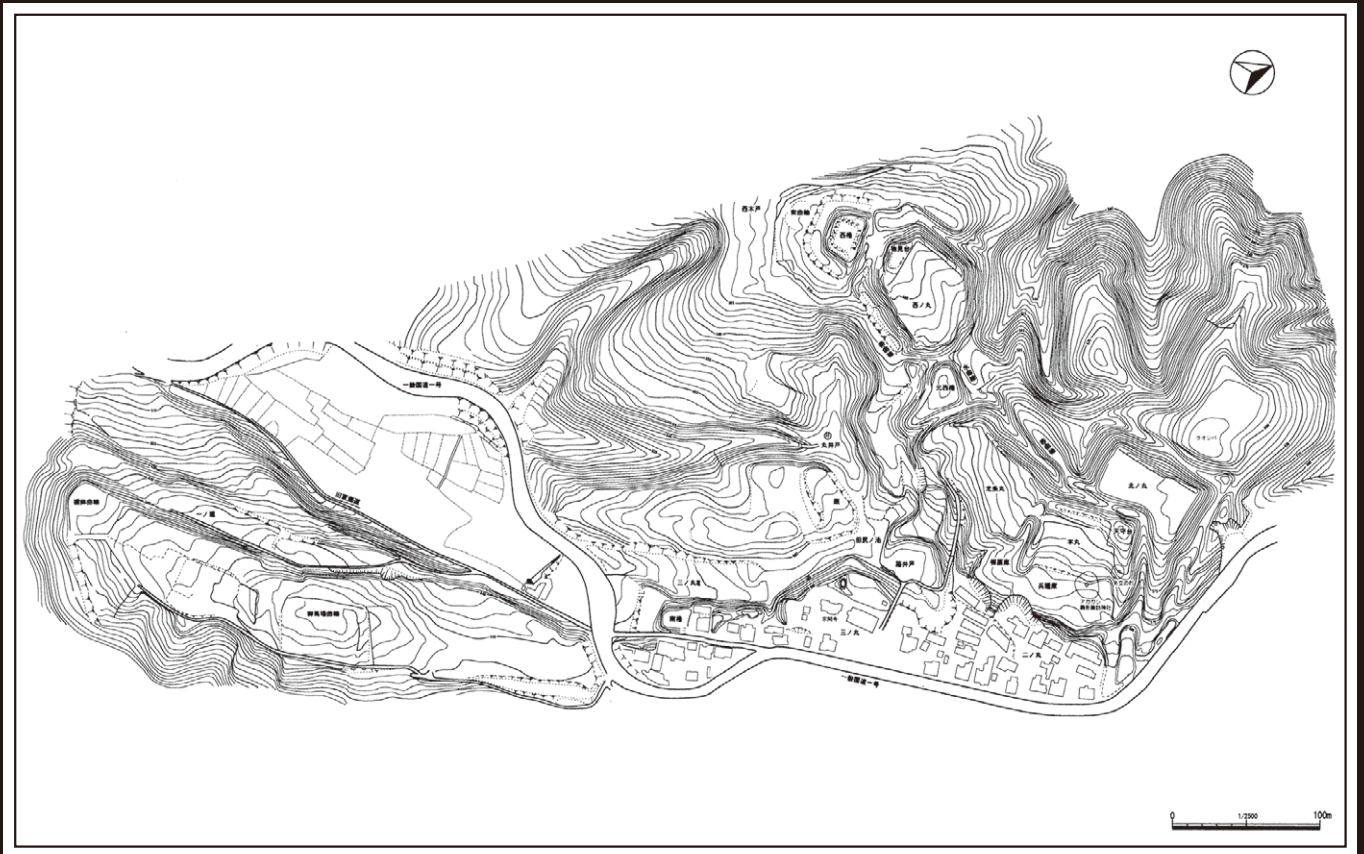
山中城跡市民作業奉仕活動 年代不詳

三島市教育委員会は昭和 47 年より山中城跡の環境整備事業に着手し、平成 4 年度（1992）に事業を終了した。平成 24 年度より傷みの目立つ西櫓・西ノ丸等の再整備事業を開始し、現在も再整備工事を行っている。また大正 2 年（1913）以来、地元山中新田の人々により、定期的な清掃活動が現在に至るまで続けられている。

主要参考文献

〔単行本〕相田二郎著『小田原合戦』（名著出版、1976）、鈴木良一著『後北条氏』（有隣堂、1988）、藤木久志著『雑兵たちの戦場 中世の傭兵と奴隷狩り』（朝日新聞社、1995）、下山治久著『小田原合戦—豊臣秀吉の天下統一』（角川書店、1996）、小和田哲男著『中世の伊豆国』（清文堂出版、2002）、NPO 法人城郭遺産による街づくり協議会編『戦国時代の静岡の山城—考古学から見た山城の変遷—』（サンライズ出版、2011）、黒田基樹著『戦国北条氏五代』（戎光洋出版、2012）、同著『小田原合戦と北条氏』（吉川弘文館、2013）、同編『北条氏年表 宗瑞 氏綱 氏康 氏政 氏直』（高志書院、2013）、同著『戦国大名 政策・統治・戦争』（平凡社、2014）、下山治久著『戦国北条氏五代の盛衰』（東京堂出版、2014）、〔図録〕『小田原城とその城下』（小田原市教育委員会、1990）、『早雲寺の歴史と文化』（箱根町立郷土資料館、1993）、『図録 三嶋大社宝物館』（三嶋大社、1998）、『特別展 秀吉襲来—近世関東の幕開け—』（横浜市歴史博物館、1999）、『平成 28 年真田宝物館特別企画展図録 戦国の真田』（長野市教育委員会文化財課・松代文化施設等管理事務所〈真田宝物館〉、2016）、〔史料集〕杉山博・下山治久・黒田基樹編『戦国遺文 後北条氏編』（東京堂出版、1989-95）、〔報告書〕史跡山中城跡調査専門委員会編『戦乱の森 史跡山中城跡 史跡公園基本構想』（三島市、1978）、『史跡山中城跡』（三島市教育委員会、1985）、『史跡山中城跡Ⅱ』（同前、1994）、『史跡山中城跡 発掘調査と環境整備事業の概要』（同前、2001、2004 改訂）、『史跡山中城跡—北条流角馬出しや障子堀の残る山城—』（同前、2002）、『菰山城跡「百年の計」きわめる・つたえる・いかす・郷土の誇り』（伊豆の国市文化振興課、2014）、〔自治体史〕『三島市誌』中・下・増補資料編Ⅱ（1959・1992）、『静岡県史』通史編 2・資料編 7・同 8（1994-1997）

※本展及びパンフレットの企画・編集は当館学芸員柿島綾子が担当した。掲載資料のうち所蔵者名を付さないものは三島市教育委員会所蔵資料である。



山中城跡全体図

平成28年度 富士・沼津・三島3市博物館共同企画展
駿東・北伊豆の戦国時代 —北条五代と山中城—
会期 平成28年10月15日(土)～平成29年1月22日(日)

会場 三島市郷土資料館
発行日 平成28年10月15日
印刷 ナポー株式会社

主催 富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会
発行 三島市郷土資料館
三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045